学生による学生調査の特徴と意義に関する考察
—「学生IR」の可能性—

〇渡辺健太郎（大阪大学大学院）
ke.wtnb@gmail.com
上畠洋佑（金沢大学）
yousukeu@staff.kanazawa-u.ac.jp

0. アウトライン

1. はじめに

2. 問題の所在

3. 分析の方針

    3.1 分析枠組み

    3.2 分析に使用するケース

4. 分析

    4.1 正課教育の活用

    4.2 分析結果の比較

5. 結論

1. はじめに

1. はじめに

■目的

学生による学生調査の特徴とその意義について検討する

■背景

「学生は調査対象、教職員は調査主体という二分法の間で見落とされてきたものはなかったのだろうか？」

1. はじめに

■ケース

当時学部生の本研究代表者が行った新入生調査

■分析枠組み①

学生による学生調査の機会が正課教育の成果を実践として活用できる場となる可能性

■分析枠組み②

学生の当事者性が調査結果の解釈を深化させる可能性

2. 問題の所在

2. 問題の所在

■学生調査をめぐる今日的状況

・「エビデンスに基づく意思決定や計画策定等にIR（Institutional Research）の活用が推進されるようになり、学内データの分析や学生調査などを実施する大学も多くなってきた（西郡ほか，2016:35）」

・FD第２期（1999年～2006年）の最大の成果は、学生による授業評価が日本の大学に定着したこと（園月 2007）

2. 問題の所在

■学生調査に関与するアクター

・学生

・教職員

■それぞれのアクターの役割

・学生＝調査対象者

・教職員＝調査主体

⇒この二分法によって見過ごされてきた問題があるのでは？

2. 問題の所在

■問題①：正課教育内容を応用する機会の浪費

・今日では、専門性の涵養が求められる（本田 2005）

・社会学をはじめとして、量的・質的に関わらず、調査法を正課教育に取り込んでいる学部は少なくない

・学生調査において、「学生は調査対象」であり続けることは、学生が専門性を高める機会を見逃してしまう

2. 問題の所在

■問題②: 当事者性が欠落した分析

・分析者の解釈は分析結果の構築に影響

Ex.) 2変量の相関関係（量），語りの解釈（質）

・学生のコンテクストを有しない分析者が解釈を行ってしまえば、調査結果からは調査対象者の当事者性が欠落

3. 分析の方針

3.1 分析枠組み

■RQ.1

学生による学生調査は、正課教育による学びを実践に移す機会となるか

⇒当時学部生の報告者に対する聴き取り調査から

■RQ.2

同一データの分析において、教員と学生では分析結果が異なるか

⇒自由記述の分析結果を教員と学生で比較

3.1 分析枠組み

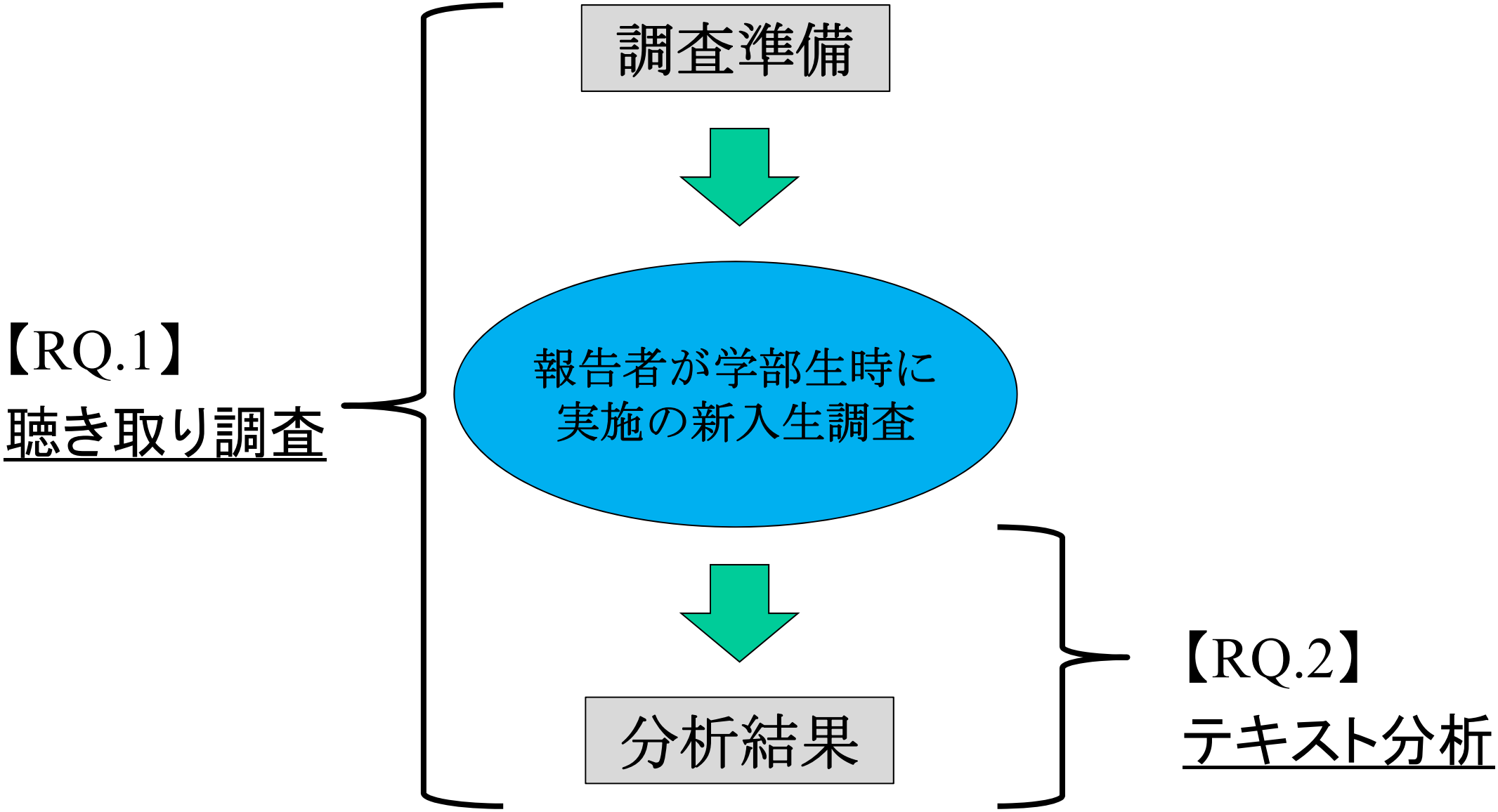

図1　本研究の分析枠組み

3.2 分析に使用するケース

■調査主体：報告者を含む学部生3名

■調査期間：平成26年10月から平成27年1月

■抽出方法

・平成26年度後期開講の学域共通科目履修者

・適性人数200名以上の共通教育科目からランダム抽出された3科目の履修者

3.2 分析に使用するケース

■調査方法:集合法

■質問項目

学生の属性、大学の制度・設備に対する改善要望、その具体的な記述

■回収状況(渡辺2015)

1437票の配布に対し、1357票の有効回答(回収率:94.4%)

4. 分析

4.1 正課教育の活用

■調査プロセス

調査企画、調査資金獲得、調査設計、調査に必要なリソースの発注、調査対象の授業科目担当教員との調整、実査、コーディング・データ入力、分析、報告

■正課教育内容の実践

・調査設計…サンプルの代表性

・コーディング、データ入力…調査実習での経験

・分析…統計解析の技法、分析ソフトウェアの使用経験

・報告…計量分析データの図示の方法

4.2 分析結果の比較

■例1：成績交付時期の早期化に関する要望（N=11）

・「成績表の交付が遅い」

・「成績開示の時期をもう少し早くしてほしい」

■教員の解釈

・成績交付時期の早期化がなぜ必要なのか分からない

■学生（報告者）の解釈

・成績交付と同時に来期開講科目時間割も交付

・アルバイト学生はシフト表を提出するのが困難

4.2 分析結果の比較

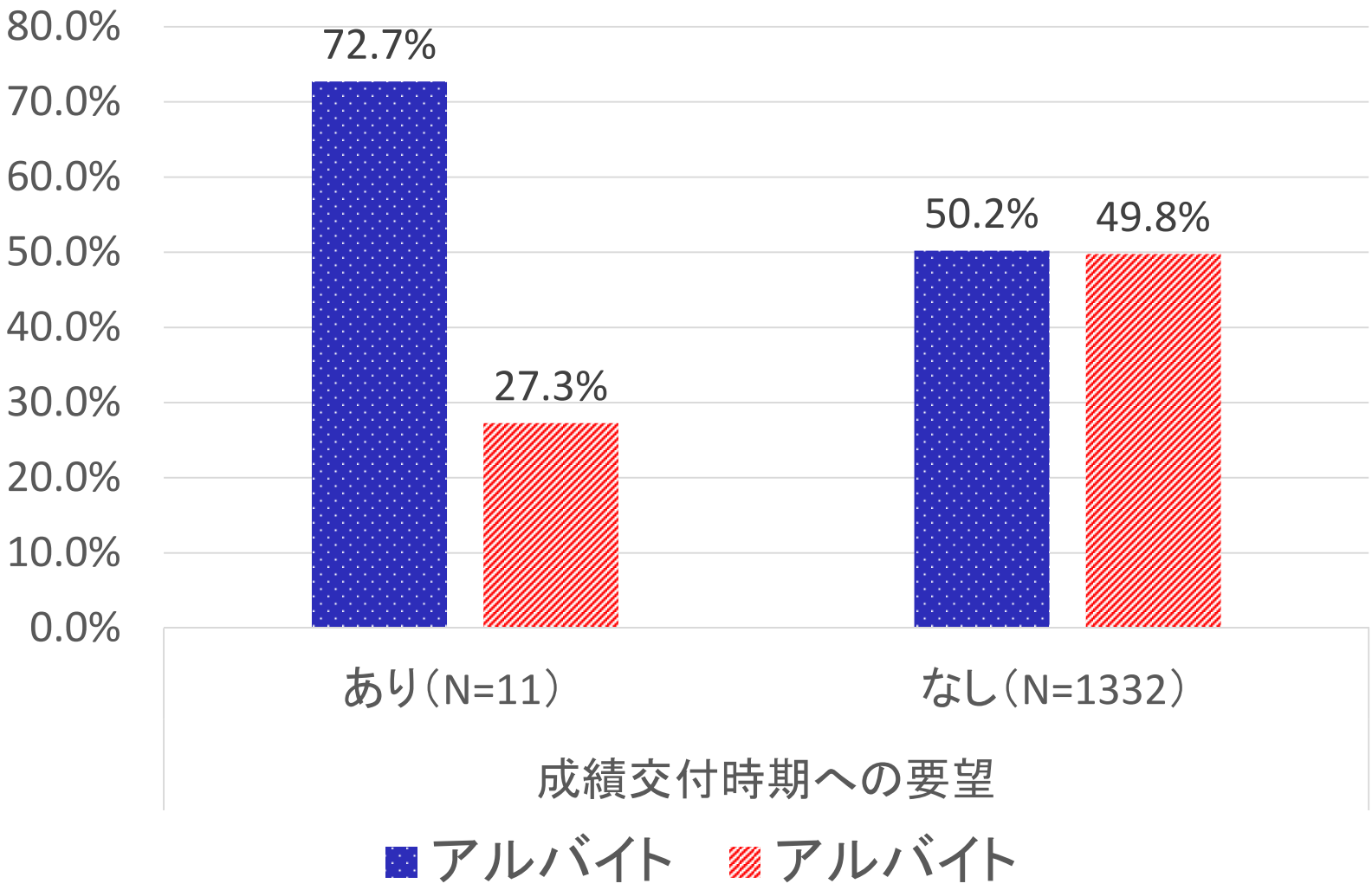

図2　成績交付時期への要望とアルバイトの有無の関係

4.2 分析結果の比較

■例2：駐車許可証の発行に対する不満（N=47）

・「1年からでも車通学をOKしてほしい。」

■教員の解釈

・制度、設備に対するありふれた不満

■学生（報告者）の解釈

・公共交通機関を使用するよりも自家用車を使用するほうが経済的、時間的コストを削減できる学生が一定数存在する

4.2 分析結果の比較

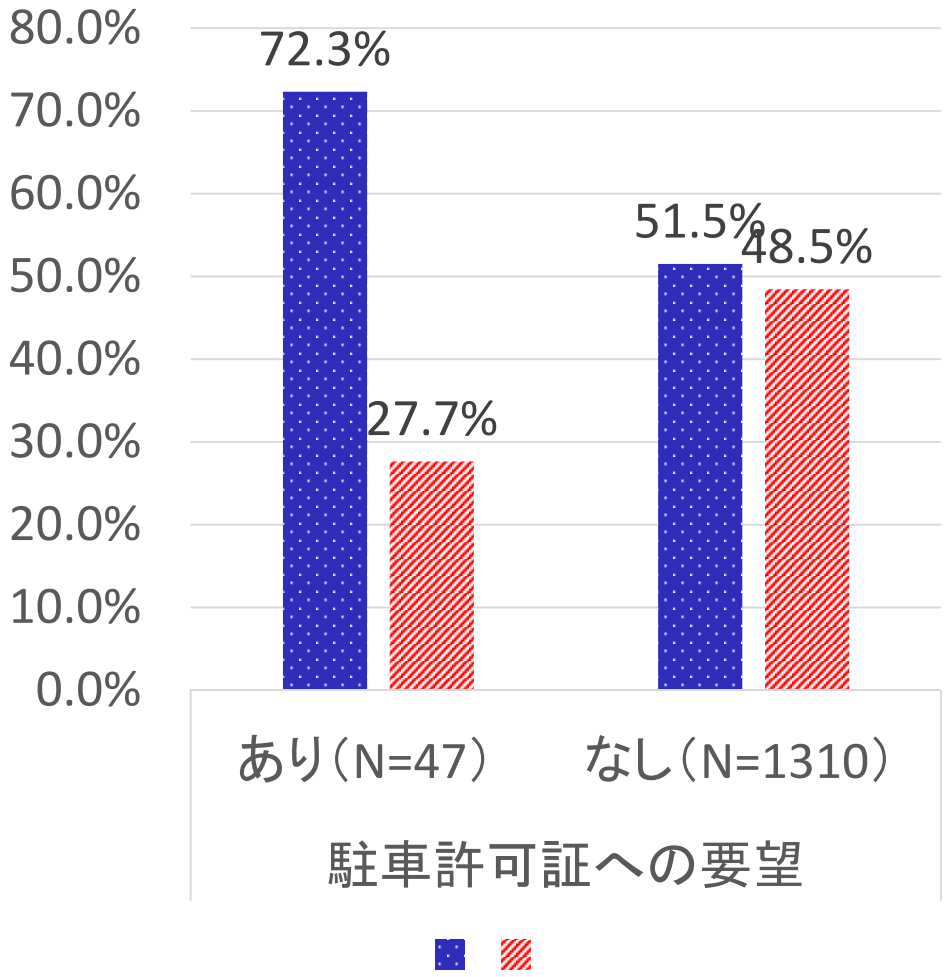

図3　駐車許可証への要望と出身地域の関係

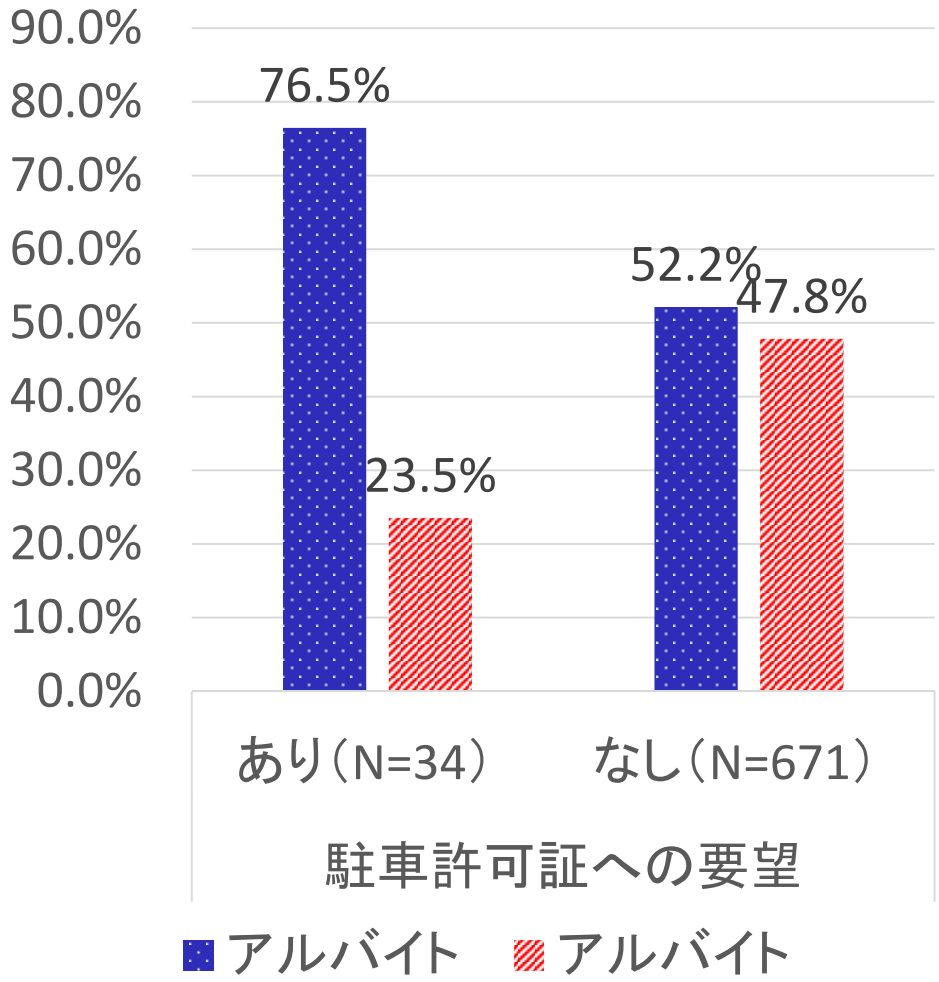

図4　駐車許可証への要望とアルバイトの有無の関係（北陸三県出身者のみ）

5. 結論

■学生による学生調査の特徴①

・正課教育で得た知識を実践的に応用する機会

⇒専門性を高める好機

■学生による学生調査の特徴②

・データ解釈における網羅性を高める

⇒これまで見落とされてきた問題の発見

教職員が担うIR活動のひとつである学生調査に学生が参画する特徴や意義が明らかとなり、「学生IR」概念が示唆される。

5. 結論

■課題①：調査員バイアス

・データ取得への学生の関与がデータに及ぼす負の効果

Ex.) 無回答率、非建設的な不満の表出

■課題②：データのアクセス範囲

・個人を特定できるような機微情報へのアクセスの問題

Ex.) 学生の学籍・教学に関する個人情報

■課題③：既存の学生参画活動との整理が必要

・「学生FD」に関する活動実績や研究成果との整理

文献リスト

●本田由紀, 2005,『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版.

●西郡大ほか, 2016,「大規模学生調査を利用した大学新入生における主　体的学習経験の規定要因分析」『佐賀大学全学教育機構紀要』4:35-48.

●圓月勝博, 2007,「６　日本の大学におけるFDの現状と課題―学生による授業評価から学生調査へ―」『＜転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際比較研究＞研究成果報告書（研究代表者　山田礼子）』:139-147.

●渡辺健太郎, 2015,「多様化する学生のニーズについての調査研究」金沢大学学生部編『平成26年度学生企画プロジェクト奨励費成果報告書』金沢大学, 1-6.